慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	二〇一四年度ベイティン遺跡(パレスチナ自治区)における考古学的発掘調査
Sub Title	The 2014 archaeological excavations at Beitin, Palestine : preliminary report
Author	杉本, 智俊(Sugimoto, David Tomotoshi) 菊池, 実(Kikuchi, Minoru) 間舎, 裕生(Kansha, Hiroo)
Publisher	三田史学会
Publication year	2015
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.84, No.1/2/3/4 (2015. 4) ,p.523(523)- 536(536)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	文学部創設125年記念号(第1分冊) 論文 民族学考古学
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20150400-0523

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

二〇一四年度　ベイティン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的発掘調査

杉本智俊・菊池　実・間舎裕生

一　はじめに

慶應義塾大学文学部杉本研究室は、二〇一四年十二月二十六日から二〇一五年一月四日まで、パレスチナ自治区ベイティン村[1]ワディ・タワヒーン谷にあるネクロポリス（ベイティン遺跡墓地地区）において考古学的発掘調査を行った[2]。この調査は、二〇一二年度から始まったベイティン遺跡調査・保存プロジェクトの一環で、パレスチナ観光・考古省（Ministry of Tourism and Antiquities）と共同で行われている。

当初これらの墓の調査は夏季休暇中に予定されたが、ガザ地区空爆などによる情勢悪化のため、冬季に延期された。夏季休暇中には、同遺跡ブルジュ・ベイティン地区の塔とよく似た遺構の知られるヨルダン・ハシミテ王国のカスル・アブ・ルクバ遺跡との比較研究を行った。これに関しては、稿を改めて論じたい。

今年度の調査隊の編成は、

共同隊長：杉本智俊（慶應義塾大学教授）、ジハド・ヤシン（パレスチナ自治区考古局長官）

スーパーバイザー：菊池実（東京基督教大学准教授）、間舎裕生（慶應義塾大学非常勤講師）、バッサム・ヘルミ（観光考古省ナブルス支局）、ジャベル・アフマド・ルジュブ（観光考古省ヘブロン支局）

遺構実測：渡部展也（中部大学准教授）

遺物実測、トレースとりまとめ：藤澤綾乃、高田優衣（以上、慶應義塾大学文学研究科）であり、この他に日本人学生ボランティア九名（阿部美奈萌、有吉亮、大内絢、小谷部優、木下圭祐、長尾琢磨、原田悠香、福田彰

寛、村田明佳音）が参加した。

二　昨年度までの調査状況

二〇一二年度には、ワディ周辺の全面的な表面調査を行い、竪坑墓十一基、横穴墓五三基を確認し、その分布図を作成した（杉本・間舎二〇一三）[3]。これらの墓はほぼすべて盗掘されていたが、その性格を把握し、記録を残すため、二〇一三年度からその代表例の発掘調査を行うこととした（杉本・菊池二〇一四）。

ワディ[4]の両岸は硬質石灰岩の浸食で形成された複数の段丘となっており、横穴墓 rock-cut tombs はその全体で確認された。墓は段丘の垂直面に水平に掘削されており、多くが内部に複数のロクリ（単数形ロクルス）[5]を持つ形態となっていた。ロクリは、玄室の壁にトンネル状に掘りこまれた細長い壁龕のことで、遺体やオシュアリと呼ばれる石製納骨容器を置くために用いられた。これはローマ時代初期のエルサレム近郊で知られるユダヤ人の家族墓に典型的な形態である（Hachlili 2005; Hachlili and Killebrew 1999; Kloner and Zissu 2007; Regev 2004; Tsaferis 1970 参照）[6]。

一方、竪坑墓 shaft tombs は、ワディ南西部の丘の頂上部[7]に集中しており、形態と出土土器から移行期青銅器時代のものと考えられる。二〇一三年度の調査で実際に竪坑墓と確認された数は十一基であったが、本年度、同じ丘の西側部分にさらに少なくとも二〇基以上の竪坑墓があることが確認された[8]。厳密な分布の把握は今後の調査を待たなければならないが、この南西の丘に、移行期青銅器時代の竪坑墓とローマ時代の横穴墓が隣接したネクロポリス（墓域）があったことは明白である。

調査地区は、この南西の丘の頂上部に設定した。見晴らしは非常によく、二基のローマ時代の横穴墓が東に開口部を向けて造られていた（図1）。竪坑墓はその前に広がる平坦部に掘られていた。二基の横穴墓のうち北側のもの（以降 RT49）[9]は、二〇一三年度に発掘調査を開始したが、七本あるロクリのうち二本と外部構造の調査は完了していなかった。二〇一四年度はそれを継続すると同時に、その南側に隣接するもう一基の横穴墓 RT50 の発掘調査も行うこととした。RT49 のスーパーバイザーは昨年度に引き続き菊池とヘルミが、RT50 は新たに間舎とルジュブが担当した。

図1　RT49、RT50全景

三　RT49（図2-1、2-2）

1．調査概要

RT49は岩盤を掘りぬいた「前庭」を持っていた。開口部の大きい前室のような形状で、高さ約一七八センチメートル、幅約三一七センチメートル、奥行約二〇〇センチメートルである。[10] 入り口は縦長の矩形で、幅約四四センチメートル、高さ約七六センチメートルで、その周囲は幅約七一センチメートル、高さ約九八センチメートルの範囲で矩形に彫りこまれていた。入り口部分の壁の厚さは約四八センチメートルで、方位は三五〇度、すなわちほぼ真東に向いていた。

入口の内部はただちに深く落ちており、矩形のピットが造られていた。ピットの上部は、左右と奥の三辺でほぼ平らな寝台状の棚となっており、その幅は約一〇〇センチメートルである。結果として、玄室全体もほぼ矩形となり、三辺の棚からそのまま同レベルで各辺二本のロクリが計六本掘り込まれていた。また、ピットの奥の立ち上がり面にも一本ロクルスがあり、この部分のみ二層のロクリ構造となっていた。

玄室は、三つの棚と下部のピットを覆うドーム状に掘

図 2-1　RT49 のファサード

図 2-2　RT49 の内部

削されていたが、浸食による崩落も多かった。この一年の間にも天井の一部が崩落し、上部のテラスから土石が流入していたので、本年度の調査開始時点で再度クリーニングが必要であった。

本年度の主たる調査対象は、まだ掘り残されていた玄室の正面左側（西面南側）と右辺左側（北面西側）の二本のロクリであり、前者をローカス五一〇、後者をローカス五一一とした[11]。また、ピット床面のクリーニングの層をローカス五一三、玄室内北側の棚の土砂の流入のあった窪みをローカス五一二、入口直下の北東の床隅の崩落部をローカス五一四とした。前庭南東隅の開口部はローカス五一五、墓の前面の表土のクリーニングはローカス五一六であった。

2. 調査結果

（1）玄室奥左側のロクルス（ローカス五一〇、図3）

このロクルスの前面は、昨年度の調査終了後に崩落した天井の土石で覆われていた。それを除くと、ロクリ自体には湿気を含んだ粘質のテラロッサが全体に詰まっていた。ロクリの長さは二二〇～二三〇センチメートルであったが、中で十センチほど右側に屈折していた。幅は入口付近で約五一センチであったが、入口から約六五センチの屈折部で約六七センチとなり、最奥部で約四八センチであった。ロクリの形状はよく保持されており、屈曲しつつも、最終的に隣の石棺のあるロクリとほぼ並行していた（杉本・菊池二〇一四参照）。

覆土からは、ローマ時代の土器片が少数出土し、炭化物も確認された。リング状の本体に複数の火口がつく形式のヘロディアン・ランプ（図4）も出土した。これはこの墓の年代を確認する上で意味があるであろう。床に近い所からは、両足のすねの部分が確認されたが、それ以外の部分は形状をとどめておらず、散乱骨の様相で

図3　玄室奥左側のロクロス（L510）

図４　L510 出土のヘロディアン・ランプ

あった。

（２）右側面奥のロクルス（ローカス五一一、図５）

このロクルスでは、入口部分の形状は確認できたが、そのすぐ内側で径二〇～三〇センチほどの石が大規模に落下した様相であった。おそらくロクルスは掘り切られておらず、掘削段階で崩落があって中止したものと思われる。竪坑墓にぶつかった可能性も考えられるが、直上のテラスではそのような開口部は確認されなかった。遺物は乏しく、土中よりローマ時代の土器片がわずかに出土したのみである。ロクルスの幅は約四二センチメートル、高さは約八六センチメートル、奥行きは調査できた範囲で約九〇センチメートルであった。他のロクリと比べて幅も狭く、このことも墓の掘削段階で作業が中止された可能性を示している。

図５　右側面奥のロクロス（L511）

（３）玄室中央のピット（ローカス五一三、図６）

玄室の中央部分は、昨年度床にまで到達していなかったので、本年度石灰岩の岩盤まで露出させた。結果的に、このピットは墓の入り口及び三辺の棚から約一一〇セン

図6　玄室のピット（L513）

チメートルの深さであったことが確認された。奥行は約一七〇センチメートル、幅は入口付近で約一二〇センチメートル、最奥部で約一〇〇センチメートルであった。遺物としては、ローマ時代の土器片がまばらに認められた。

（4）玄室内の右側棚部分の窪み（ローカス五一二）及び入口直下の北東の床隅の崩落部（ローカス五一四）

これらの陥没部に関しては、鉄器時代の墓によく見られる遺骨集積部屋（リポジトリー）の可能性も想定して調査にあたったが、単なる残土であり、意図的な構造でないことが確認された。目立った遺物も存在しなかった。

（5）前庭の南東隅の開口部（ローカス五一五、図7―1）

昨年度、前庭の表土を清掃した際、すでにこの開口部は確認されていた。入り口部分は、上部が破損した四角形（底辺約六〇センチ、高さ約六〇センチ）をしている。内側から状態のよく残っているローマ時代のクッキングポットなどが多数出土したので、本年度も、その性格把握のために継続して調査をおこなった。奥行は二〇一三年調査終了時点で約八〇センチであった。

図 7-1　RT49 前庭南東隅の開口部（L515）

結果として、この横穴は相当な規模持っていたことが判明した（北西―南東軸：約二三〇センチメートル、北東―南西軸：約一九八センチメートル）。おそらく移行期青銅器時代の竪坑墓に付属して造られた玄室部分であったと思われる。[12] 実際、RT49 のファサードは正面から見て左側の壁が丸く抉られているので、それが竪坑の一部であったとすれば、その直下にあるピットは玄室部分として整合することになる。[13]

また、この南側では、天井部から矩形の掘り込み（ローカス六〇六、図7-2）が施されており、その下部がローカス五一五と直結していたことが判明した。さらにその南側では、後述するように、RT50 の入口と隣接した岩盤にさらに別の竪坑墓の開口部が確認された。矩形の掘りこみは、形状から貯水槽と推察される。ローカス五一五の内側にあった礫層や泥のような細かな土壌もそれを示唆していると思われる。また、この横穴からは、昨年に引き続き多量のローマ時代の土器片が出土したが、それ以降のものは確認できなかった。この貯水槽が RT49 と同時期かどうかは判別できないが、ローマ時代に使用されたと考えてよいであろう。

（6）墓前の巨石

RT49の前庭正面に置かれている巨石は、昨年度ブルドーザーによって一帯のテラスを清掃した時に、前庭内にあった石が、その外側に移動させられたものである。この石は、台形に近い形状をしており、側面から見ると横向きの凸型となっている[14]。高さは約七七センチメートル、幅は約六七センチメートル、側面から見た高さは約六〇センチメートルで、墓の入口にほぼはまる大きさである。その位置、形状、大きさから考えると、この石がRT49の封石であった可能性もある。

3. まとめ

図7-2　矩形の掘りこみ（L606）とRT49の位置関係

本年度のRT49の調査では、昨年度の調査からさらに二本のロクリを発掘し、この墓が、上部のロクリ六本と下部のロクリ一本から構成されるほぼ矩形の墓であることを確認した。検出した炭化物は放射性炭素年代測定にかけるが、すでに墓の形状やヘロディアン・ランプ等から、この墓はローマ時代初期（紀元一世紀）に放棄されたものと考えられる。その後、盗掘は受けているが、再使用の痕跡は認められなかった。

昨年度の調査で、この墓の棚を持つ構造が鉄器時代の墓と似ている可能性が指摘され、鉄器時代のランプが出土したこともあり、今回のひとつの留意点となっていた（杉本・菊池二〇一四参照）。特に、鉄器時代の墓に固有の集骨室（再埋葬の際のリポジトリー）が認められるかどうかが要点であったが、玄室の南東床部分に崩落による自然穴があったのみで、そのようなものは確認できなかった。この墓がもともと鉄器時代に造られた可能性は低いであろう。

一方、前庭部分に知られていた開口部（ローカス五一五）は、実際には相当の規模があり、おそらく移行期青銅器時代の竪坑墓の横穴（玄室）部分であったと判断された。RT50の入口部分からも竪坑墓が検出されており、

図８　RT50のファサード

この地点では移行期青銅器時代の墳墓群をぬうようにローマ時代の墓が掘られた現象が確認された。また、この横穴の南側上部には矩形の掘り込みがなされており、これは貯水槽として、ローマ時代に再利用されていたと考えられる。

四　RT50（図８）

1．ファサード部

RT50はRT49から五メートルほど南方に位置していた。開口部は東北東―西南西（方位三三六度）に軸を持っており、RT49よりも若干西に向いていた。ファサードは二段に構成された平らな面からなっており、庇をもたない。

ファサード全体の幅は約一六〇センチメートル、最大高約一二〇センチメートルで、ほとんど凹凸がないほどに平坦に加工されていた。外側のファサード部は、幅約四五センチメートル程度の範囲で平坦に加工されており、内側のファサード部はさらに約四〇センチメートルほど奥まって平坦に削られていた。開口部そのものは、内側ファサードより五センチメートルほど奥まっており、壁の厚さは約四〇センチメートルだった。開口部の幅は約

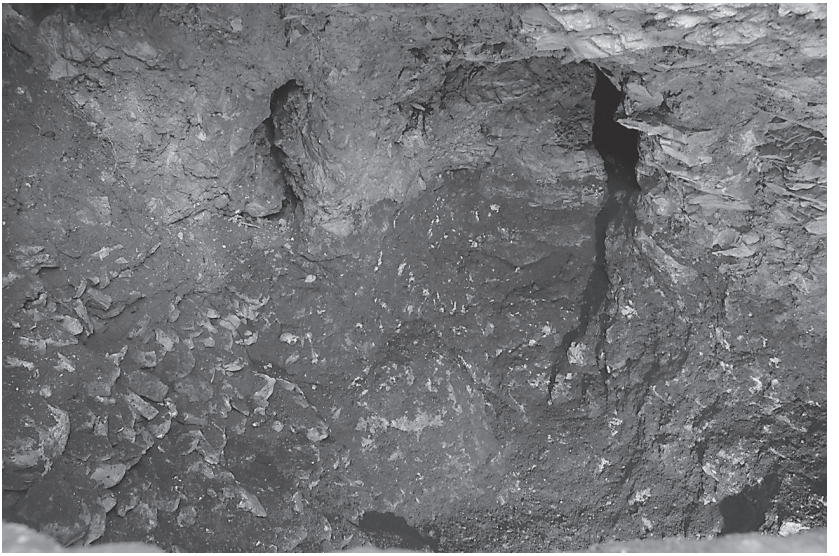

図9　RT50の内部

四七センチメートル、高さ約五九センチメートルで、その周囲は幅約六〇センチメートル、高さ約六七センチメートルの範囲で彫りこまれていた。

ファサードの床（ローカス六〇二）は、開口部を中心として幅（南北）約一六〇センチメートル、奥行き（東西）約七〇センチメートルの矩形の範囲で一〇センチメートルほど掘り込まれた前庭となっていた。前庭部は平坦ではなく、入口に向かってなだらかに傾斜していた。また、前庭部北東端には、竪坑墓と考えられる直径約一〇〇センチメートルの円形の掘り込み（ローカス六〇三）が検出された。切り合い関係と墓の形状から、竪坑墓は横穴墓に先行するものと考えられる。

2．玄室（図9）

比較的丁寧に整形された入口付近に対して、RT50内部（ローカス六〇四）はほぼ全く加工されていなかった。最大で奥行きは約一九〇センチメートル、幅は約二三〇センチメートルを測る。天井部は入口部より五〇センチメートル程度は平坦に加工されているものの、それ以外の部分は整形されておらず、入り口部分よりも高くなることはない。底部の岩盤は入口部より約一三〇センチ

メートルの位置で検出されたが、全く平坦ではない。

ロクリも一つも確認できなかったが、北西部にRT49と連結している横穴が確認された（RT49側では昨年の段階から確認されていた）。二基の横穴墓が内部の坑道で連結すること自体は珍しいことではない。しかし、開口部の大きさは三〇センチメートル程度しかなく、内部もまったく加工されていないため、人為的に連結させたと考えるよりも、岩盤の崩落によって連結したとする方が理に適っているであろう。また、玄室の南端部にも岩盤の崩落による土砂の流入があり、さらなる崩落の危険があったため、岩盤の検出作業は行わなかった。

3．まとめ

以上のことより、RT50は使用されることなく、掘削途中で放棄されたものと考えられる。十数点の土器片が検出されたが、ほとんどがローマ時代のものであった。エルサレム周辺では、紀元七〇年の第二神殿崩壊後、墓が造りかけのまま放棄される事例が確認されており、RT50もその例の一つと考えることもできるかもしれない。しかし、出土遺物は僅少であり、RT50の建造時期を特定することはできない。鉄器時代のものである可能性がある口縁部土器片も二点検出されたが、これだけでRT50が鉄器時代から使用されていたとすることは、難しいであろう。

五　結論

二〇一四年度のベイティン遺跡の調査では、RT49、RT50というローマ時代の二基の横穴墓の調査を完了することができた。墓の構造、出土土器、特にヘロディアン・ランプから、これらの墓はヘレニズム時代からローマ時代初期（紀元後一世紀）の墓であり、エルサレム周辺で見られるユダヤ人の墓とよく似ていることが確認された。

このことは、同様の墓が五〇基以上ベイティン遺跡ワディ・タワヒーン地区で確認されていることとも合わせ、当時のベテルの社会構造を知る上で大きな意味があるであろう。ケルゾーらによるベイティン（ベテル）遺跡発掘では、ヘレニズム・ローマ時代の報告は非常に限定的であった（杉本二〇一四参照）が、本調査の結果は、この時代のベイティンに一定のユダヤ人共同体があった可能性を示していると言えるであろう。

これらの墓が鉄器時代に造られた可能性は低いであろ

うが、移行期青銅器時代の竪坑墓はさらに多く存在することが確認された。それらの厳密な分布については、来年度以降、正確に記録していきたい。

註

（1）ベイティン遺跡の位置については、杉本・間舎二〇一三図1を参照されたい。

（2）本報告は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究（A）課題番号24251015（研究代表者、杉本智俊）による成果の一部である。

（3）分布図は、その後も新たな情報を得るごとに更新している。

（4）床部は、幅約一〇〇メートル、南北約八〇〇メートルで、現在は果樹園などとなっている。

（5）ヘブル語では、コヒム（単数形コック）と呼ばれている。

（6）この型式の墓は、一般にヘレニズム後期（前一三〇年頃）から紀元後七〇年の間に限定されている。

（7）テル・ベイティンより南西約三〇〇メートルに位置する。

（8）この地域にはほかにも竪坑墓の存在を思わせる凹部が多数存在しているが、それらを試掘すると墓でない場合も多く、そのすべてを確認することは困難である。

（9）これらの名称は、分布地図（杉本・間舎　二〇一三）で与えたものを使用している。

（10）類例は、エルサレムのサンヘドリアにも見られる。

（11）昨年度発掘済みのロクリに関しては、入口を入って左側のロクルスから、それぞれローカス五〇九、ローカス五〇八、ローカス五一〇、ローカス五〇五、ローカス五一一、ローカス五〇七、底部のロクルスはローカス五〇六とした。

（12）ただし、高さは確認できなかった。

（13）ローカス五一五は、RT49が掘削された際偶然に発見されたとも考えられる。

（14）ローマ時代のユダヤ社会では、「ゴーラル」（転がすもの）と称される墓石が一般的であったことが知られている。

参考文献

Faust, A. and Bunimovitz, Sh. 2014 “The Judahite Rock-Cut Tomb: Family Response at a Time of Change,” *Israel Exploration Journal* 58, 150–170

Hachlili, R., 2005 *Jewish Funerary Customs, Practices and Rites in the Second Temple Period*, Brill

Hachlili, R. and Killebrew, A. 1999 *Jericho: the Jewish Cemetery of the Second Temple Period* (IAA Reports 7), Jerusalem

Kloner, A. 1980 “A Tomb of the Second Temple Period at French Hill, Jerusalem,” *Israel Exploration Journal* 30, 99–108

Kloner, A. and Zissu, B. 2007 *The Necropolis of Jerusalem*

during the Second Temple Period, Peeters
Regev, E., 2004 "Family Burial, Family Structure, and the Urbanization of Herodian Jerusalem," *Palestine Exploration Quarterly* 136, 109–131
Strange, J. F., 2014 "Late Hellenistic and Herodian Ossuary Tombs at French Hill, Jerusalem," *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 219, 39–67
Tzaferis, V., 1970 "Jewish Tombs at and near Giva'at ha-Mivtar, Jerusalem," *Israel Exploration Journal* 20, 18–32
杉本智俊　二〇一四年「ベイティン（ベテル）遺跡における考古学的調査の課題」『聖書学論集』四六号、六一－八二頁
杉本智俊・間舎裕生　二〇一三年「二〇一二年度ベイティン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的一般調査」『史学』第八二巻第一、二号、一〇五－一二七頁
杉本智俊　菊池実　二〇一四年「二〇一三年度　ワディ・ワタヒーン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的発掘調査」『史学』第八三巻第二、三号、一一九－一三八頁